



生徒会副会長 挨拶

生徒会副会長 前嶋 郁哉

私が第75代生徒会副会長という立場で活動させていただき1年が経過しました。

この1年は、私にとって大きな成長を与える1年となりました。私が生徒会副会長となり初めて行った役割は、学校行事の司会でした。私自身今までの人生を振り返ってみても人の前で何かを行うという経験がなかったのに加え、大勢の前で話すということが苦手な性格という事もありこの司会という役割は最後まで苦手でした。司会を行っている中で戸惑ってしまい何度も先生方に頼らせてもらうことが多くありました。進行している中でも言葉が早口になってしまい皆様にご迷惑をお掛けしたと思います。聞き取りづらい司会を行ってしまったことをこの場をお借りして謝罪させていただきます。しかし、この司会という役割を通して私自身大きな成長ができたと思っています。未だに人の前で話すという事は、苦手ではありますが司会を務める前と後では、大きな違いがあると私自身実感しています。

今年度は例年と違い新型コロナウイルス対策が緩和され学校行事が過去の形で行えるようになりました。第75代生徒会メンバーで最初に行った行事は、スポーツ大会でした。このスポーツ大会は例年行ってきたサッカー大会の代わりとして行ったものです。初めての行事の企画ということもあり多くの先生方のお力をお借りして行事を進行することができました。当日は怪我等がなく終えることができてとてもよかったです。最初の行事を皆様が楽しめるような物にできたのは、生徒会の仲間や生徒の皆様、先生方

のご協力があったからこそものだと思います。次に迎えた行事は、球技大会でした。球技大会は、私達が入学してから1度も経験したことのない行事で苦戦することが多くありました。私は、バレーボールを担当していました。トーナメント上で問題はありましたが、審判を協力してくださったバレーボール部の生徒や先生方の協力もあり皆さんが楽しいと思える行事にすることができました。そして生徒会としての最後の行事である五葉祭のシーズンが始まりました。今年は、一般公開を行ったこともあり今までは比べものにならないくらい大変だったのに加え、とても貴重な経験をすることができました。私は、主に体育祭を担当させていただきました。当日は、雨天のため中止となってしまいましたが、企画力の面で大きく成長することができました。また私達の代で甲府工業本来の五葉祭を企画、実行できたことを幸せに思います。

最後となりますが、この1年私達に協力していただきありがとうございました。1年前皆様を私が信任してくれたからこそそのような立場活躍することができました。甲府工業の生徒会を務めることができたことは、私にとっての誇りであり今後一生忘れられない経験だと思います。並びに先生方、保護者の皆様、同窓会の皆様この1年間私達へのご協力ありがとうございました。これからの甲府工業のますますの発展を祈念し、第75代生徒会副会長の挨拶とさせていただきます。



生徒会長 挨拶

生徒会長 山口 陽太

第75代生徒会長に就任してから早くも1年が経ちました。生徒会長になると志した1年前のことを思い出すと、長い1年が始まるということに対する覚悟と乗り越えられるのかという不安でいっぱいだったことを思い出します。しかしながら生徒会長としての役割を終えてこの一年間を振り返ると本当に短くて貴重な1年間でした。たくさんの方々に支えられ、生徒会の活動をしながらたくさんのかげがえのない思い出を作らせていただきました。今は生徒会長になってよかったと心から思います。

今年は様々な行事の制限がなくなり学園祭や球技大会など多くの生徒が楽しみにしている行事を最大限の形で開催できました。私たちは入学したころから制限された状態が続いていたため誰も本来の行事を経験したことがありません。そのような中でこれまでの学園祭を取り戻すということは、初めから行事を作り上げるようなものでした。もちろん過去の資料や先生方の経験談でイメージすることはできませんが一度も経験していないということは行事を運営していくうえでとても難しい部分だったと感じます。そのような中で開催した学園祭でしたが、たくさんの方が盛り上げてくださり多くの生徒の思い出に残るものになったと思います。この学校だからこそ、この学校でなければできない盛り上がりや学校内に収まらず保護者の方々や他校の生徒に感じてもらったのは大きな成果でした。生徒会としては楽しもうとしている生徒たちの期待に最大限にこたえることが私たちのやらなけ

ればいけないことだという気持ちを常に軸として持っていたため行事を全力で楽しんでくれる工業生のパワフルさに毎度勇気もらっていました。工業生ならではの部活やクラスでの根強い繋がりをはじめ、生徒会長を引き継ぐ最後の日まで文句なく最後までともに生徒会を続けてくれた生徒会役員の皆さん、先生方やOBの方々などたくさんの方々に支えられたおかげで最高のものを作り上げられたと思います。そして生徒会もこの難しい運営を乗り越えたことで第75代生徒会の3年生はもちろん第76代生徒会の1・2年生もたくさんの財産を得ることができました。私たちとともに運営を精一杯頑張ってくれた1・2年生には来年第75代を超える行事を作ってくれるポテンシャルとエネルギーがあると信じています。私たち3年生が先輩たちの活躍している姿を見て育つように、生徒会に限らず1・2年生は3年生の素晴らしい部分を存分に吸収して年を追うごとに甲府工業が進化していくことを心より期待しています。

結びに、生徒会誌「五葉」を発行するにあたり、執筆にご協力頂いた多くの方々へ心から感謝いたします。また、先生方、同窓会の皆様、保護者の皆様を始めとする甲府工業高校の全ての関係者の皆様の生徒会活動へのご協力に感謝申し上げます。今後も甲府工業高校生徒会が益々発展していくことを祈念し、第75代生徒会会長の挨拶とさせていただきます。



今年度を振り返って

生徒会主任 神宮司 啓太

本年度は、始業式・入学式で新年度が始まり、部活動紹介と応援歌合唱練習と生徒会行事を行いました。新型コロナウィルスまん延後行えていなかった応援歌合唱練習も1年生生徒が体育館に集合し、応援団や吹奏楽部の2・3年生の協力のもと無事に甲府工業生の一員となることができました。

5月にはいり、山梨県高校野球春季大会決勝戦が行われ、選抜高等学校野球大会で優勝した山梨学院と対戦しました。雨の降る中、9回に4点差を追いつき延長12回延長タイブレークの末16対15で山梨学院に勝利し9年ぶりに春季大会優勝を飾りました。

5月10日より山梨県高等学校総合体育大会男が行われ、期間中は4年ぶりに小瀬スポーツ公園で本部を構え、生徒会本部、応援団、企画実行委員会をはじめとして、文化部の生徒も各部の応援に参加してくれました。応援団は3日間早朝より、団旗を立て、各部の勝利を信じ応援してくれました。大会に参加した部は、自転車部の優勝をはじめ、新体操部・相撲部が優勝。バドミントン部・卓球部・バレーボール部が準優勝など沢山の部で得点を獲得しました。男子総合優勝5連覇を目指しましたが、惜しくも1点差で準優勝となりました。1試合・1ゲーム・1ポイントの大切さを痛感する大会となりました。来年度にむけて学校全体で山梨県高等学校総合体育大会男子総合優勝奪還に向け1年間この思いを忘れず努力したいと思います。

総合体育大会の結果により、ボクシング部、剣道部、柔道部(男子・女子)、陸上駅伝部、空手部など12の部が関東大会に出場しました。

また全国総合体育大会には、弓道部、自転車部、柔道部(相撲)、新体操部、卓球部、ボクシング部が予選を勝ち上がり山梨県代表として参加しました。

文化部の活動では放送委員会が全国大会出場、建築研究部は全国若年者ものづくり競技会で敬賞受賞など、多くの成果が上がりました。

今年度は5年ぶりに学園祭が一般公開を行うことができました。日頃の学習の成果やイベント、模擬店等大勢の方に来校いただき開催することができました。コロナ禍を経て新しく生徒たちが学園祭をどのように行っていくのか準備を進める姿が多くみられました。

日頃生徒会活動ができるのは保護者の方々や教職員、同窓会をはじめ多くの方々のご理解とご協力のおかげです。今後も変わらぬ思いで本校を見守っていただけることを心よりお願い申し上げます。そしてこれからも本校がより発展できるよう、生徒共々日々努力を重ねてまいります。今後ともより一層のご支援ご協力をお願いいたします。

令和5年度 生徒会担当教員名簿

生徒会本部顧問	氏名	部顧問	所属
主顧問	神宮司 啓太	硬式テニス	建築科
副顧問	仲田 瑞男	ボクシング	機械科
	渡辺 柚香	写真	電気科

生徒会分掌

主任	神宮司 啓太	硬式テニス	建築科
副主任	仲田 瑞男	ボクシング	機械科
顧問	平崎 雄也	自転車	社会科
	内藤 大輔	剣道	体育科
	雨宮 敬将	ラグビー	体育科
	高橋 透	弓道	機械科
	渡辺 柚香	写真	電気科
	大曾根 秀勝	陸上駅伝	電気科
	玉 大地	卓球	建築科



限界突破

校長 菊島 圭一

羽中田昌さんをご存じでしょうか。車椅子のサッカー指導者として、昨年度は山梨学院高校の監督として全国選手権を指揮しました。羽中田さんは韭崎高校黄金期のエースとして第59回選手権から3年連続で全国の舞台に立ち、1年次に3位、2年次に準優勝、超高校級の天才ドリブラーとしてその名を轟かせます。ところが、3年次に腎臓の病気で突然の療養、試合にも出られませんでした。最後の全国選手権は、医師から「15分だけプレー」の許可。2回戦、準決勝と後半の15分に出場し、決勝へと進みます。そして、決勝はリードを許す展開から予定より10分早くピッチに、その瞬間、国立競技場が湧きたちます。羽中田さんの猛攻ですぐに1点取り返します。さらに羽中田さんは相手をすべてかわしてシュート、しかしキーパーに阻まれ、そのまま終了、全国の頂点には立てませんでした。

高校卒業の翌年は大学を目指して浪人し、ヨーロッパでプロになることを夢見ました。しかし、バイクのパンクによる単独事故。脊髄損傷により下半身不随となってしまいます。

歩くこともできなくなり、当然、大好きなサッカーもできなくなりました。そんな時に、辛口のサッカー解説者セルジオ越後さんは、「羽中田、病氣も怪我も気力だよ。人間の運命で最も大切なものは何か、それは『出会い』だろう。あの検見川のグラウンドでやったサッカーを思い出して頑張れ。」と話したといいます。

羽中田さんは、「何も残っていないというのは間違いだった。私がサッカーに注いだ情熱と同じ深さだけ、サッカーは私に様々なものを返してくれていた。」と気付いたそうです。後に、「寝たきりのベッドでよく地図を眺め、世界旅行を楽しんだ。想像の翼は無限に広がる。スペイン…どこなところだろうどんな

人に出会えるのだろうか。本場のサッカーにしがれる自分。コーチングスクールで勉強する自分。充実した日々を送る自分を想像した。」と語っています。

その後、山梨県庁へ就職し、高校時代の同級生まゆみさんと結婚しました。

そして1995年、羽中田さんはサッカー指導者を志して県庁を辞める決意をします。後押ししたのは、「諦めなければ目標は逃げないんじゃないの」というまゆみさんの言葉でした。スペインに5年間留学、Jリーグの監督もできるS級ライセンスを取得しました。世界で初となる車椅子のプロサッカー監督としての人生が始まったのです。

病氣、事故という壮絶な不幸に見舞われながらも、羽中田さんは、「もう自分を責めるのはやめた。過去への後悔と未来への不安を一切捨てよう。」とサッカーへの夢をあきらめませんでした。サッカーこそが羽中田さんを死と絶望の淵から救ったといえます。

ところで、機山工業高校が3年連続で全国高校サッカー選手権に出場した時の選手である新海さんも、現在車椅子で生活しています。数年前に羽中田さんと新海さんは卓球を始めました。実は、私の妻と羽中田さん、奥さんのまゆみさんは同級生で、今でも自宅を訪問する仲です。妻は高校まで卓球部だったので、当初、二人のコーチ役を務めました。しばらくして妻は「あの二人は、私が6年かけて身に付けた技術を数ヶ月でマスターしている。」と驚いていました。並外れた運動センスもさることながら、目標に向かって研究、努力する推進力が全く違うといいます。

私を含め、皆さんは、仕事や勉強、部活動、資格、コンテストなど、それぞれの目標に向かって頑張るなかで壁にぶつかるときがあります。気力が薄れたり、限界を感じたり、困難に背を向けたくもなります。時にはもっと楽な道を選んだり、誰かのせいにして辞めてしまったりするかもしれません。しかし、羽中田さんの生き方からは、自分で限界を決めてはいけないうのだと教えられます。

生徒の皆さんは、中学時代を含めたこの4年間、特に部活動に関しては様々な制約を受けてきました。学校の休業、分散登校、部活動の休止、県外・校外での活動制限、大会の中止や縮小など、大事な時期に「やりたくてもできない」、「活躍の場がない」など、悔しい思いをしたことでしょうか。

そのような中でも本校では、チームのモチベーションや個人の粘り強い努力を絶やさずに頑張ってきました。その結果、昨年度の県総体四連覇、今年度の春季高校野球県大会優勝、自転車部の関東総合優勝、技能五輪全国大会に県内高校生としての初出場など、誇らしい成果を挙げました。1・2年生はこれに続き、さらに歴史を刻む活躍をしてほしいと思います。また、優勝することや勝つことだけでなく、自分の目標に進達することにも大きな価値があります。そして、3年生は4月から新たな場で勝負のときが始まります。

それぞれの目標に向かい、甲府工業魂で「限界突破」に挑んでください。